

『狭衣物語』における源氏の宮付の女房達

——男君への応対を中心に——

大塚 誠 也

つくり物語には、女房達のさまざまな活動が描かれる。活動内容は、客人の取り次ぎをしたり、逢瀬の手引きをしたり、主人に代わって不平を述べたりといくつかのパターンに分けられるが、『狭衣物語』（以下『狭衣』と略す）の齋院には、複数の女房が客人狭衣に対して、からかうような応対をする場面が集中して見られる。

この、女房集団が男君を客人として遇するという行為は、『枕草子』や『紫式部日記』の男性が登場する記事や、『源氏物語』（以下『源氏』と略す）蜻蛉巻の薫と弁のおもと達のやりとり等に散見され、平安期の文学において一種のパターンとなっていたようだ。

女房達は物語において脇役や端役といった立場に置かれることがほとんどであるが、いわゆる語り手や生成者といった存在にも相当しうる存在であり、かつ実際の享受者ともなっていた存在である。彼女達の活動は、研究上より注視されるべきだろう。⁽¹⁾

本稿は、『狭衣』における女房の応対場面に着目する。源氏の宮付の女房達が狭衣と応対する場面を取り上げ、その特質を論じ

つつ新たな作品理解に至ることを目的とする。

管見では、『狭衣』中で女房が応対する場面は七例あるが、そのうち主要なものは源氏の宮付の女房達に集中して見られる。これから源氏の宮付の女房達の特異性がまず予想される。そして本稿二節で詳しく確認するが、『狭衣』作者が六条齋院祿子内親王に仕えた「宣旨」と目されていることを考え併せると、⁽²⁾作中における齋院源氏の宮付の女房集団の問題は、実在の六条齋院祿子内親王家の女房集団とも関わりうるのではないか。『狭衣』における源氏の宮付の女房達の問題を、作品の生成・享受圏という視点も含めながら考えたい。

以下、まず諸作品中の男君に応対する女房達の場面例を概観した上で、『狭衣』に登場する源氏の宮付の「宣旨」「女別当」「新少将」等を詳しく見ていく。この際、彼女達が同時代の実在女房や『源氏』の女房といかに関わるかという問題に力点を置く。最後に源氏の宮自身と女房達との関係性に触れた上で、まとめとして源氏の宮付の女房達がどのように特殊な位置にあるのかという

ことを論じたい。

一 諸作品中の男君に應對する女房達

本節では『狭衣』成立前後の諸作品から、女房達が客人に應對する場面を引用する。密通の手引きや外出先での邂逅等、「應對」と連続性を持つ場面は複数存在するが、ここでは原則として女房が「客人」の男君に應對し、実際に言葉交わす場面に対象を絞った。つぎのような挨拶的な應對は、女房の活動として一つのパターンとみなすことができるだろうし、次節以降の『狭衣』の特質を考える上でも参考となるだろう。

A 『枕草子』四七段 藤原行成と清少納言達が戯れる。

職の御曹司の西面の立部のもとにて、頭弁、物をいと久しう言ひ立ちたまへれば、さし出でて、「それは誰ぞ」と言へば、「弁候ふなり」とのたまふ。「何かさも語らひたまふ。大弁見えば、うち捨てたてまつりてむものを」と言へば、いみじう笑ひて、「誰かかかる事をさへ言ひ知らせむ。『それさなせそ』と語らふなり」とのたまふ。(一〇三・一〇四頁)

B 『源氏物語』野分卷 夕霧の挨拶に、明石の姫君の女房達が応じる。

風さわぎむら雲まがふ夕べにもわするる間なく忘れぬ君
吹き乱りたる刈萱につけたまへれば、人々、「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひわかざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」など

かやうの人々にも言少なに見えて、心解くべくもてなさず。

(③二八三頁)

C 『源氏物語』蜻蛉卷 薫の戯れに、弁のおもとと中将のおもとが応じる。

……いと答えにくくのみ思ふ中に、弁のおもととて馴れたる大人、「そも睦ましく思ひきこゆべきゆゑなき人の、恥ぢきこえはべらぬや。……」(中略)

「女郎花みだるる野辺にまじるともつゆのあだ名をわれにかけめや

心やすくは思さで」と、ただこの障子にうしろしたる人に見せたまへば、うちみじろぎなどもせず、のどやかに、いとおく、

花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露に乱れやはする

と書きたる手、ただかたそばなれどよしづきて、おほかためやすければ、誰ならむと見たまふ。(⑥二六七・二六八頁)

『枕草子』は定子等の主家に関わる記事が多いが、Aなどは行成と女房達との応酬がよくうかがえる場面である。Bは『源氏』正編における場面で、野分の見舞いの歌を送った夕霧に対し、女房達が刈萱に付いた手紙をからかう場面である。Cは続編における場面で、薫に應對する女房達がよく描かれている。蜻蛉卷は女房達と客人薫との関係が重層的に描かれる場面構成になっており、召人の「小宰相」や零落した「宮の君」等も登場する。とりわけCは『紫式部日記』冒頭部の藤原頼通の記事「しめやかなる夕暮

に、宰相の君と二人、物語して……」(二二六頁)との関連も指摘されており、客人の男性と女房との対応場面として、一つのパターンを見出しうるところである。ただ、日記の頼通記事は女房側の発言が省略される等、簡潔な描写になっているという相違がある。

このように、女房集団ないしはそのうちの一人が客人に対応する場面は、挨拶的であり、かつ色めいたやりとりやかからかいといった要素を持つ傾向にあるといえよう。

ここでさらに『狭衣』と同時代の作品の用例を紹介したい。『更級日記』では、源資通との飲談の場面(三三三頁)がある。⁽³⁾『浜松中納言物語』では、中宮付の女房達のうち「少将内侍」が主人公に色めいた和歌を送る場面(一七七頁)があり、彼女はのちに召人となっていたことがわかり(二九〇頁)、内親王降嫁の沙汰止みに関わる女房となる。⁽⁴⁾『逢坂越えぬ権中納言』では、女房「小宰相」等が根合の準備で主人公に戯れかかる場面がある(四三三頁。他に、『夜の寝覚』では中宮付の女房「新少将」が男主人公に懸想される場面(六九頁)がかるうじてあるものの、これは密かになされておき、挨拶的な女房集団の対応とは一線を画すといえよう。総じて、『夜の寝覚』以外は薫からの影響がうかがえる。⁽⁵⁾

このような同時代的な状況の中、『狭衣』はその分量に比して源氏の宮付の女房達が狭衣に対応する場面が多くある。次節以降、登場人物ごとに詳しく確認し、検討を加えたい。

二 卷三の女房「宣旨」「女別当」「大人しき人々」

『狭衣』には多くの女房が登場するが、中でも齋院卜定後の源氏の宮付の女房達は、よく狭衣に対応する。源氏の宮は狭衣と兄妹同然に育った女君であるが、理想的な造型や齋院に卜定されること、狭衣と結ばれないこと等から、実在の六条齋院祿子内親王モデルとともに議論されてきた。⁽⁶⁾『狭衣』に関して、古くは大式三位作者が存在したことが、『僻案抄』や『調度歌合』に『狭衣』作者が宣旨と記されていること、及び作品内部において齋院関連の詳しい場面描写があること等から、現在は祿子家女房宣旨作者説が定説となっている。⁽⁷⁾

このため、源氏の宮と祿子に関する議論は『狭衣』の研究上、重要となる。しかし、作者や同時代の享受者といった問題を考えるとき、源氏の宮付の女房達に対しても、同様に注意深い検討が必要となるのではないだろうか。源氏の宮付の女房達も、宣旨をめぐる実在の作者圏、及びそこでの帰属意識や紐帯意識と無関係だったとは考えられない。

『狭衣』中で狭衣に対応する女房は、密通の手引き等を除くとごく限られる。管見では七例あるが、母堀川の上付の「中務」という女房が「道の果てなと嘆きし人のありこそ、ことわりには変らね」(①六七頁)と独り言めかして言う例と、齋院卜定以前の源氏の宮付の「大納言の君」が「賜はせよ。見くらべはべらん」(①二四六頁)と言う例以外は、齋院卜定後の源氏の宮付の女房による五例である。以下、卷三の「宣旨」「女別当」「大人しき人々」

及び巻四の「新少将」「御簾の中の人々」を順に見ていきたい。

① 宣旨

宣旨は源氏の宮付の上臈女房である。

D 巻三 宣旨、新婚の狭衣をからかう。

「この御猫、しばし預けさせ給へかし。人肌つける春を求むるよりは」とのたまふを、宣旨といふ人うち笑ひて、「今更は、などてか。人は誰をかは求めさせ給はん。いと大人しき御扱ひをさへせさせ給ふなるに、猫は所狭う思されめ」と

……

(② 二三八頁)

初齋院で源氏の宮の猫を欲しがる狭衣に対し、宣旨が一品の宮との新婚生活をからかう場面である。狭衣はこの引用箇所 of のち不本意な結婚生活を、表面上取り繕った返事をする。

齋院源氏の宮に作者と同名の「宣旨」が仕えていることに關しては、すでに小町谷照彦氏が「作者が洒落つ氣で自らを作中に登場させたものか」と注している。⁽⁷⁾ この指摘は卓見である。源氏の宮は裸子を意識させる登場人物であるとおぼしく、したがって彼女に仕える宣旨も実在の作者宣旨を意識させる登場人物と考えるべきであろう。

D は当時の読者達にとつても、なじみ深い作者が登場しているような「洒落つ氣」を感じさせるものだったと言えるかもしれない。狭衣の心中は不如意な夫婦関係や源氏の宮思慕により鬱屈としているが、宣旨とのやりとりにはそれは反映されておらず、前後の内省の叙述に対して軽妙さが際立っている。

しかし物語における宣旨登場の意味はそれだけだろうか。実は

宣旨はもう一度登場する。

E 巻三 本院渡御に見える女別当と宣旨の名。

やむごとなき[※]人は、女別当、[※]宣旨など、人々同じと、いま四十人、童八人乗るべき車は(中略)いかばかりめでたらんずらん。
(② 一四六・一四七頁)

※人は一人々十人はかりは(静嘉堂文庫蔵本)——十人は(為相本等)

※宣旨—ナシ(黒川本・承応版本・平出本)

E はD からほどない箇所であるが、源氏の宮が本院に渡る行列の場面であり、女別当と宣旨の名が挙げられている。前後には入念な準備のもと、盛大に催された渡御の様子が描かれる。「宣旨」の名が見えない伝本が三つあるものの、ほとんどの伝本に「宣旨」が「やんごとなき人」、ないしはやんごとなき人々の代表格として記されることは看過できない。

「女別当」は次項でも詳しく考察するが、その名の通り上臈女房である。「延喜式」「齋院司」における「祓物」項の「院女別当」已下並従車後(女別当已下藏人以上乗私車……)という記述や、「三年齋」項の「女別当已下並乗車……」という記述が示す通り、女房の筆頭格であった。「延喜式」の記述に「宣旨」の名が見えず、「狭衣」のE に女別当と併記される形で「宣旨」の名が見えることに、どのような意味を見出すべきだろうか。

『狭衣』研究において従来注目されてこなかったが、裸子家の諸資料からは実在の「女別当」も確認できる。そしてこの女別当は、天喜三年(一〇五五)の物語歌合において宣旨と一番左右に

つがえられていた。

霞隔つる中務宮

左 女別当

九重にいと霞は隔てつつ山のふもとは春めきにけり (一)

玉藻に遊ぶ権大納言

右 宣旨

有明の月待つ里はありやとてうきても空に出でにけるかな (二)

物語歌合は相当な盛会だったとおぼしい。『栄花物語』巻三七「けぶりの後」には「物語合とて、今新しく作りて」③四〇二頁と記録され、『後拾遺和歌集』八七四番詞書には「宇治の前太政大臣「かの小弁が物語は見どころなどやあらむ」とてこと物語を留めて待ち侍りければ……」と、関白藤原頼通が進行に口をはさむほど執心していたと記録される。この一番左右を女別当と宣旨が務めたことの意味は重いだろう。物語歌合とEの「女別当、宣旨」を考え併せると、Eの点描が宣旨当人の自負心のようなものといくばくか結びついていて可能性が想定できないだろうか。当時の物語作品は無署名が原則であるが、『紫式部日記』の物語書写の⁽⁸⁾記事等、自作を何らかの形で叙述する例も存在しないわけではない。

このように考えると、直前のDにおける狭衣と宣旨のやりとりの場面も考察の余地が広がるだろう。Eの上臈女房の場面からDの応対の場面を捉え直すとき、主人公狭衣に対して、物語作者自身、ないしはそれが投影された登場人物が直接言葉を交わすとい

う図式が看取できる。DにせよEにせよ、物語内における作者宣旨のやや特権的な位置づけを見出すべきではないだろうか。

②女別当

女別当はEで見た通り、筆頭格の女房で「やむごとなき人」と記されていた。この女房にも狭衣と応対する場面が、Eからほどなくしてある。

F巻三 女別当、狭衣を後押しする歌を詠む。

つゆばかりまどろまれぬに、ほととぎすをち返りうちはへ鳴く声いと近きを、大將殿御前近く候ひ給ひて、

思ふことなるともなしにほととぎす尋ね来にけり賀茂の社に

と独りごち給ふを、※女別当、

語らば神も聞くらんほととぎす思はん限り声な惜しみ

そ

明けはなるる山際、春ならねどをかし。

(②一五五頁)

※女別当——女別当いとちかくゐて(為家本・為根本等)——女へ

たうき、て(文禄本)

Fは狭衣が源氏の宮思慕の独詠歌を詠み、それに女別当が賀茂神社の地にちなむ和歌を詠みかける場面である。女別当は狭衣の不満が源氏の宮思慕に起因すると知らずに、狭衣の願いを神も聞き届けるだろうと応援する。本来源氏の宮付の女房が詠むには不適切な内容であるが、後述の新少将と違い、語り手による批判的な叙述が見えないのは、女別当が上臈だからであろうか。もしくは、実在の女別当の存在が何らかの形で関わるのであろうか。

女別当は伝未詳だが、身分の高さというパーソナリティが第一にあって、それゆえ物語歌合の一番左という大役を担ったとおほしい。女別当の他の詠作として『出羽弁集』二二番に「……別当殿のたまへる」「雲居までにはふと見れどもすれば霞隔つる花桜かな」が見えるものの、やはり和歌等の文芸方面で活躍した女房とは考えがたい。⁽⁹⁾ただ、この「雲居まで……霞隔つる花桜かな」の詠は物語歌合一番左の和歌と酷似しており、『霞隔つる中務宮』が女別当の自作である根拠となる。そしてこの『霞隔つる中務宮』は現在散逸しているが、物語歌合が相当な盛儀であったことから、作品としての出来も悪くないものだったと予想される。

ここで物語歌合と『狭衣』の先後関係に付言しておくが、前者が天喜三年開催であるのに対し、後者は堀子内親王密通事件からの影響（天喜五年（一〇五七）や、「皇太后宮」⁽¹¹⁾（二三九頁）という呼称に見る皇子からの影響（治暦四年（一〇六八）等をめぐり、さまざまに成立時期が推定されている。ただ先行研究及び諸資料において、『狭衣』の起筆時期を示唆するものは全て天喜三年以降のものばかりであり、やはり『狭衣』は物語歌合以後の作と考えるのが妥当だろう。

以上のことから『狭衣』のE・Fに女別当という女房が登場することを改めて考えると、裸子家における地位の高さに加え、物語歌合において一番をとくに務めたことに對する宣旨からの紐帶意識のようなものが要因として想定できるのではないだろうか。紐帶意識には、女別当の物語創作の腕に對する敬意も含まれていたと考えられる。

この問題との関連で、『霞隔つる中務宮』と『狭衣』という物語同士の影響関係にも付言したい。『霞隔つる中務宮』は『風葉和歌集』に三首入集しており、うち二首がつぎの贈答である。

左大将御あそびに笛つかうまつりて侍りけるあしたに給はせける
霞へだつるの御門の御歌

たぐひなく心にすみし笛のねは月の都もひとつなりけり

（一二三七）

御かへし

笛の音は月の都にとほけれど清き心や空にすみけむ

（一二三八）

この一場面はつぎの『狭衣』冒頭部の吹笛の場面に類似している。

G 卷一 狭衣がやむを得ず笛を吹く。

……いたう惜しみ給ふ笛の音をやや残すことなく、吹き澄まして、
稲妻の光に行かん天の原はるかに渡せ雲の架け橋

と音のかぎり吹き給へるは、げに月の都の人もいかでか聞き
驚かざらん。⁽¹²⁾

（一四三頁）

『霞隔つる中務宮』には左大将という人物が帝の御前で笛を吹き、月の都と異ならないという賞賛の和歌を受ける場面があったようである。『狭衣』でも狭衣が御前で笛を吹き、月の都の人も聞き驚くだろうと語り手が述べる。この一致はすでに萩谷朴氏をはじめ、諸氏が指摘するところである。ここからも宣旨の女別当に對する意識がうかがえるのではないか。

加えて、管見ではいまだ指摘がないが、『狭衣』の登場人物「中

務宮の姫君」にも『霞隔つる中務宮』からの影響がうかがえそうである。中務宮の姫君は卷二の女二の宮付の女房の噂話に登場する女君で、狭衣の吹笛の様子を伝聞して絵に描いたエピソードが語られた上で、女房から狭衣の「具」、すなわち妻妾に相応しいと評される(①一七〇頁)。のちに狭衣が中務宮の姫君の家を訪れると、すでに引越したあとで会えなかった(①一九四頁)。

『霞隔つる中務宮』の現存資料に姫君の存在は確認できないが、物語歌合の一番左に提出された物語であり、恋の要素があったはずだということ、優美な左大将が登場することから、この作品の中務宮には姫君がいたのではないかと考えられている^②。推測の域をでないものの首肯されよう。『狭衣』の中務宮の姫君は端役であるが、『霞隔つる中務宮』の中務宮の姫君から影響を受けた人物であると考えるべきではないだろうか。

その場合『狭衣』において、『霞隔つる中務宮』の影響下にある吹笛の場面をもとに、『霞隔つる中務宮』の影響下にある中務宮の姫君が狭衣の絵を描いたことになる。これは「吹笛と月の都」、及び「中務宮の姫君」という、『霞隔つる中務宮』から『狭衣』への二重の影響ということになる。また卷一から卷二へ渡る広範囲の影響ということにもなる。

女別当は従来看過されてきたが、自身及び『霞隔つる中務宮』という二つの相において、『狭衣』と縁深い女房なのではないか。

③ 大人しき人々

女別当のFの場面の直後には、「大人しき人々」とのやりとりが記される。

H 卷三 本院の簡素さを氣遣う狭衣に、女房達が応じる。

「……齋院こそ、なまよろしくおはしまさんは、あしかりぬべかりけれ」とて、よろづつくろひ歩きたまへば、大人しき人々は、「かやうにさだ過ぎたるさまにては、さし出でにくくはべりけり。よろづの人に向ひたるやうにおぼえて、この若き人々に、何しに車より下りつらんとわびたまふめる」と聞こゆれば…… (②一五五・一五六頁)

狭衣に所の顕わさを訴える返答をするだけの場面であるが、女房とのやりとりとして念のため挙げた。狭衣と源氏の宮付の女房達との、心理的な距離の近さ等がうかがわれる。

三 卷四の女房「新少将」「御簾の中の人々」

前節は卷三における源氏の宮の初齋院から本院入りの期間を扱ったが、本節は卷四における春の齋院の場面を扱う。

④ 新少将

新少将は狭衣が春に齋院を訪れる場面に登場する。伺候名に本文異同があるが、本稿では便宜上「新少将」と呼称する。

Ⅰ 卷四 新少将、狭衣の戯れに應じる。

「君達さへ、余りつつみたまひて今は目も見せたまはねば、いみじうつれづれにこそなりにたれ」とのたまへば、^{*}新少将とて大人しき人、「ものにもがなとこそ、皆思ひたるけしきども侍るめれば、まいて、何かは見入れ参らする人も侍らん」と聞こゆれば、「心憂のことや。物恐ろしからで過しし末の中頃、くやしうこそ思ひ出でらるれ」など、いづれと

く言ひ戯れたまひて、

御垣守る野辺の霞も暇なくて折らで過ぎゆく花桜かな
と、わざとなく言ひすさびたまへば、※少将、

「花桜野辺の霞のひまひまに折らでは人の過ぐるものかは
さまでは、なんでふいさめか待る」と聞こゆれば、うち笑ひ
たまひて……（中略）若き人々は、あいなう汗あえてぞ聞き
ける。 ②三三五・三三六頁

※新少将—こ少将（伝為家筆本）—少将（伝為明筆本・紅梅文庫本）

—少将との（伝慈鎮筆本）

※少将—前少将（飛鳥井雅章筆本）—ナシ（伝為明筆本）

狭衣の「相手にされず無聊である」という発言に対し、新少将は
女房達の中には狭衣に気がある者もいるだろうというような返答
をする。そしてその後の和歌の贈答でも、新少将は「どうして花
（女房）を手折らないで過ぎようか、咎めもないだろう」という
挑発的な発言をする。さらに新少将は中略箇所「逢ふにしかへ
ば……」と、逢瀬を持てるならばこの身も惜しくないといい、若
い女房達の困惑が描かれる。ここでは先に見たC『源氏』蜻蛉卷
の弁のおもとの場面が想起されるが、それにしても露骨な色恋の
応対である。

新少将のように、狭衣に面と向かって好色なはたらきかけをす
る女房は珍しい。狭衣に好色めいた視線を向ける女房の存在は他
家にも確認できるが、いずれも物陰等から噂をするという構図を
取っている。今姫君付の女房達（①一〇六頁）や、女二の宮付の
女房達（①一六九頁）が該当するが、前者に至っては、未熟な女

房達が狭衣の呼びかけに答えることができないという場面に続
く¹³。新少将の応対から、やはり彼女自身及び源氏の宮家の特異性
を読み取るべきであろう。

ただ新少将等の伺候名を持つ女房は祿子家の外も含め諸資料に
見えず、あえて挙げれば物語歌合に『よそふる恋の一巻』を提出
した「宮少将」と『打つ墨繩の大將』を提出した「少将君」がい
るが、いずれも伝未詳である。本稿一節で触れた『夜の寝覚』の
「新少将」も中宮付の年若い召人であり、関連は見出しがたい。
ここではあくまで物語内での特異性の指摘にとどめる。

⑤御簾の中の人々（語り手を含む）

つぎの引用は、Iで新少将が応対した直後の場面であり、齋院
を訪れた君達が蹴鞠をしている場面である。狭衣は蹴鞠に加わら
ずにたたずんでいる。

J巻四 女房達が、狭衣を夕霧になぞらえる。

……御簾の中の人々、「まめ人の大將は、おはせずや侍りけ
る」「さらばしも、花の散るも惜しからじ」など、□々、い
と立てたてまつらまほしげなるけはひどもなり。「そのいた
う屈じたる名ざしこそ、よそへつべかめれど、こよなう見く
らべたまはんが、妬ければ」とて…… ②三三八頁

K巻四 語り手が、過去に実見した柏木と狭衣とを比較する。

……高欄にをしかかりたまへるまみ・けしき・御声などは、
かの「桜を避きて」とて、花の下にやすらひ給へりし※御さ
まを、その折は見しかど、この御ありさま、また類なげにて、
何事の折節も見ゆる。 ②三三八頁

※御さまを、その折は見しかど、この御ありさま、また類なげにて、何事の折節も見ゆる―さまよりもけしきよくなつかしきところ／＼まさり給へりとぞミゆる（伝為家筆本）―さまをそのをりおかしとみしかと此御ありさまは又たくひなくのミそなにのおりにもみえける（飛鳥井雅章筆本）―御さまよりもこよくなつかしくいまめかハしくしまさりたまへりとぞミゆる（伝為明筆本）―御さまよりもこよくなつかしういまめかしき事まさりたまへりとぞ見ゆれ（紅梅文庫本）―さまよりもこよくなつかしくいしき事まされハミなのほりぬるに（伝慈鎮筆本）

Jは女房達によつて狭衣が夕霧になぞらえられる場面であり、Kは語り手により眼前の狭衣と『源氏』若菜上巻の柏木とが引き比べられる場面である。注目すべきはKの「その折は見しかど」である。簾中の女房達にまじった語り手が若菜上巻の柏木をかつてその目で見たということである。この点はすでに諸氏の指摘するところだが、この語り手が源氏の宮付であるということは従来看過されてきた。『狭衣』における『源氏』引用は枚挙に遑がないが、これは特異である。

ここは本文異同があり、平出本・飛鳥井雅章筆本が「その折」「見しかど」という本文を有し、他本は異同があるもののいずれも「狭衣が柏木よりも勝つて見える」という旨の本文を有する。前者は柏木を実見したと明言する本文であるが、後者もJの「こよなう見くらべたまはんが、妬ければ」という狭衣の発言と照応しており、やはりこちらも柏木ないしは「まめ人の大将」夕霧を

も含めた語り手の実見を想定したくなる本文である。⁽¹⁶⁾

『狭衣』の源氏の宮付の女房に『源氏』若菜上巻の世界を見聞した者がいて、かつ現在の語り手になっていっているというのはいかなる状況であろうか。いわゆる「語り」の問題としても興味深いのが、源氏の宮家が実在の祿子家と重なり合うという点を考慮すると、本稿の議論とより深く関わりうる意味が見出せそうである。

祿子家は物語歌合を催行するほど物語を愛好する宮家であった。それゆえ物語に造詣の深い女房集団を抱えていたことは、彼女達自身の自負するところであつたろうし、外部にも周知されていただろう。源氏の宮が祿子を想起させるのと同様に、その斎院の女房集団も実在の者達が想起されるのであれば、簾中の語り手が『源氏』の世界を見聞しているという設定は、宣旨による自家の文化的なアピールのようなものとも考えられるのではないか。ただし当然、そこからは大げさな諸謙性を認めるべきだろう。

例えば『源氏』橋姫巻における弁の尼の語りに「その昔睦まじう思うたまへし同じほどの人多く亡せはべりにける世の末に」⁽⁵⁾「四六頁」や「小侍従はいつか亡せはべりにけん。その昔の若ざかりと見はべりし人は、数少なくなりはべりにける末の世に」⁽⁵⁾「一二二頁」という隔世の感の繰り返しがある。『狭衣』のKの語り手は、まさにこの数少ない『源氏』第二部世界の生き残りであり、かつ『源氏』の弁の尼の語りとも響き合うことになる。弁の尼が柏木と薫を実見できたのと同様、Kの語り手が柏木と狭衣を実見できたという構図の写しは、周到である。物語に精通している読者ほど、この大仰な仕掛けと、実在の祿子家女房達の重なる

りときに驚くのではないだろうか。

以上、『狭衣』の齋院源氏の宮付の女房達が、客人狭衣に應對する場面を見てきた。實在の裸子家女房達との重なりや、『源氏』の世界の女房達との重なりという点は、源氏の宮家の大きな独自性といえよう。また狭衣に應對する女房達には、本稿一節で見た他作品と同様に、からかいの姿勢や色事めいたやりとり等がまずは見受けられた。そしてその一方で、源氏の宮付の女房達には、召人になる者がいないことや、上臈女房や老練な女房が目立つ等、特徴的な傾向も見受けられた。

四 女房を必要としない源氏の宮

最後に、これまで見てきた源氏の宮付の女房達の在り方を、源氏の宮自身の人物造型からも考えてみたい。つぎの二点を案ずるに、源氏の宮は女房を必要としない女君であったことが、女房達の自律的ともいえる諸活動と符合するのではない。

第一に、源氏の宮が狭衣と兄妹同然に育った女君であるという点が挙げられる。狭衣は物語の冒頭からすでに源氏の宮とじかに対面することが可能な関係にあり、女房による仲介や手引き等を一貫して必要としなかった。巻四の結末部で「今は、人づてに聞こえさせたまはんもあるまじき事なれば」(②三五六頁)と源氏の宮が狭衣帝に返歌を遣わす場面があるが、この表現は物語の事態に即していない。そもそもこの二人の場面は、常に仲立ちを必要としていなかった。

第二に、源氏の宮がストーリーの起伏にとばしい女君であると

いう点が挙げられる。起伏とは、『狭衣』に關していえば飛鳥井の君の盗み出しや女二の宮の密通、偽装出産等である。これらの危機的ともいえる状況では乳母等の奸計や扶助が描かれるが、源氏の宮にはそのような状況は訪れない。狭衣が迫る場面は何度も描かれるが(巻一①五九頁等)、そこに深刻な展開はなく、女房も必要とされない。ちなみにこれは三谷榮一氏等が指摘する、源氏の宮が容姿美を詳しく描かれる反面、心中思惟を詳しく描かれない傾向とも通じるものだろう¹⁷⁾。

右の二点により、源氏の宮付の女房達はストーリー上の重要性を失うことになる。しかし本稿で詳しく見たように、彼女達は狭衣と應對する女房集団としてむしろ存在感を放っていた。「女房を必要としない」という源氏の宮の在り方は、女房達が女主人の扶助ではなく、みずからの活躍を通じて『狭衣』に登場することと相關関係にあるといえるだろう。

そして狭衣をからかったり応援したり、柏木等と引き比べたりといった特徴的な應對は、實在の作り手や読み手のイメージと重なりうる。『狭衣』の作り手や第一の読み手が祿子内親王家の周辺であることは論を俟たない。源氏の宮が祿子内親王等の影響を受けていることはしばしば「理想的」とも評されるが、女房達はそれとは質を異にするような、矜持や紐帶意識のような、女房達自身の論理で造型されているのだろう。

五 まとめ

他作品の女房達と客人との應對場面を見た上で、『狭衣』の源

氏の宮付の女房達を詳しく検討した。「宣旨」と「女別当」のよ
うな、作者や実在の人物が物語内において複雑に交錯する事例が
確認できた一方、「新少将」や「御簾の中の人々（語り手を含む）」
のような、『源氏』の影響下にありつつも、物語内において特異
な振舞いをする事例も確認できた。いずれにせよ齋院卜定以後の
源氏の宮付の女房達は、女二の宮等の他所と違い、狭衣との応対
が多量に描かれている。源氏の宮付の女房達の積極性、ないしは
自律性は、女主人が女房を必要としない存在であることに後押し
されているようである。このような女房達の活動は、主人である
源氏の宮をないがしろにしているわけではなく、彼女達がいる齋院
という空間の特異性を際立たせてもいるし、主家である源氏の宮
自身の才気を演出しているともいえる。そこには実在の裸子家女
房達が暗に示されているようである。

本稿は、源氏の宮と実在の裸子という主家の一対一の対応関係
を考察するのではなく、作中の女房集団と実在の女房集団、ある
いは『源氏』中の女房集団のような、より多様な対応に目を向け
た。旧稿では狭衣帝の乳母「大式三位」と実在の大式三位藤原賢
子の重なりを論じたが、『狭衣』においてこのような同時代的な
事例は多数存在していると推察される。これらを究明すること
は、作品世界における物語展開や登場人物の考察にも資するもの
となる。

※引用本文は、散文作品は「新編日本古典文学全集」に、和歌資料は「新
編国歌大観」に、『延喜式』は「国史大系（新訂増補版）」にそれぞれ

依り、一部表記を改めた。『狭衣物語』の本文異同は、巻三は「校本
狭衣物語」に、巻四は「狭衣物語諸本集成」にそれぞれ依り、伝本名
の表記もそれに倣った。

注(1) 近年は、古田正幸『平安物語における侍女の研究』（笠間書院、
二〇一四年）、陣野英則『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』（勉誠出版、二〇一六年）、千野裕子『女房たちの王朝物語論』『う
つは物語』『源氏物語』『狭衣物語』（青土社、二〇一七年）等の研
究が注目される。

(2) 松村博司・石川徹校注『狭衣物語上』（日本古典全書、朝日新聞社、
一九六五年）の「解説」、久下裕利『狭衣作者六条齋院宣旨略伝考』
（『狭衣物語の人物と方法』新典社、一九九二年）等に詳しい。

(3) 鬼束（田中）隆昭「宇治十帖と作者の体験―蜻蛉巻後半と紫式部
日記を中心に―」（『国文学研究』第四一集、一九九九年十二月）、
田村俊介「物語にほめたる薫論」（『国語国文』第五八巻第二二号、
一九八九年十二月）。

(4) 和田律子「宮仕えの記―物語の男君―」（藤原頼通の文化世界と
更級日記）新典社、二〇〇八年）は、『更級日記』と『源氏』、『紫
式部日記』との関連を指摘する。

(5) 三谷栄一「齋院源氏宮」（『狭衣物語の研究』異本文学論編）笠
間書院、二〇〇二年）、中城さと子「狭衣物語」と裸子内親王」（『中
京国文学』第八号、一九八九年）等。

(6) 前掲(2) 諸文献等。

(7) 小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『狭衣物語②』（新編日本古典文
学全集、小学館、二〇〇一年）の二三八頁の頭注八。

(8) 陣野英則「紫式部という物語作家―物語文学と署名―」（『源氏物
語の話しと表現世界』勉誠出版、二〇〇四年）、陣野英則「藤式部
丞と紫式部＝藤式部」（『文学』第一六巻第一号、岩波書店、二〇一
五年一月）等。

(9) ほかに、永承年間の裸子家歌合（歌合大成一三五）に「別当」の

名で二首の出詠がcaろうじて見える。

- (10) 前掲(2)松村・石川注釈書、後藤康文『狭衣物語』の成立時期
〔語文研究〕第六三号、一九八七年六月)等。

- (11) 萩谷朴『平安朝歌合大成第二卷』(同朋社出版、一九九五年)の
一一〇八頁等。なお、久下晴康(裕利)『狭衣物語』の創作意識―
六条斎院物語歌合に関連して―(『平安後期物語の研究 狭衣浜
松』新典社、一九八四年)は、『狭衣』の冒頭部を中心に、物語歌
合の「玉藻に遊ぶ権大納言」淀の沢水』『あやめも知らぬ大将』『あ
らは逢ふ夜のと嘆く民部卿』『岩垣沼の中將』との類似も指摘して
いる。

- (12) 小木喬「霞へだつる中務宮」(『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代
編』笠間書院、一九七三年)等。

- (13) 井上眞弓『狭衣物語』における奪われた女房の声をめぐって―
「うるま」という狭衣の発話言説より―(『立教大学日本文学』第
九三号、二〇〇四年二月)は、今姫君付の女房が狭衣の挨拶に応
対できない事態を、「言語伝達不能」の問題として論じる。

- (14) 直後の時代には「従一位源師子かくれ侍りて、宇治より新少将が
もとにつかはしける 知足院入道前関白太政大臣／袖ぬらす萩の上
葉の露ばかり昔わすれぬむしのねぞする」(『新古今和歌集』七八

四)、「宇治入道殿にて、雪中子日といふ事を 故北政所新少将／め
づらしためしにひかむ雪ふれば子日の松も花さきにけり」(『今撰
和歌集』三)の存在が確認できるが、『狭衣』に影響を与えた可能
性は極めて僅少であろう。

- (15) 石川徹「源氏物語の影響を受けた平安後期の文学」(『古代小説史
稿―源氏物語と其前後―刀江書院、一九五八年)等。なお前掲(7)
注釈の二三九頁頭注七で後藤氏は「その折は見しかど」に「歴史物
語の語り手の口吻に似る」と注している。

- (16) 本稿は諸伝本の共通性を指摘したが、伝本ごとの特質を論じる研
究も前掲(5)三谷著書をはじめとして多く存在する。

- (17) 前掲(5)三谷論文等。

- (18) 大塚誠也『狭衣物語』の「大式三位」と大式三位藤原賢子―物
語の結末部に関して―(『国語と国文学』第九三巻第四号、二〇一
六年四月)。

- (19) 同名の実在女房を指摘する研究に、「出雲」と「大和」を論じた
須田哲夫『狭衣物語―その社会意識と歴史意識について―』(『論
争狭衣物語2 歴史との往還』新典社、二〇〇一年)、「伯の君」等
を論じた久下裕利「フィクションとしての飛鳥井君物語」(『王朝物
語文学の研究』武蔵野書院、二〇一二年)がある。

新刊紹介

早稲田久喜の会編著

『学びを深めるヒントシリーズ 伊勢物語』

本書は「早稲田久喜の会」の一〇名が、
各自の専門と教育経験を駆使し、『伊勢物
語』の各章段、コラム、写真等を分担した

著作である。本会で約七年間にわたり検討
され、錬磨された編集には、随所に面白く
読むための工夫と配慮が見られる。本書に
収録の章段は、現行の高等学校用文部科学
省検定済教科書に採択されている全一七章
段であり、内容は学習指導要領(改訂)が
求める「主體的・対話的で深い学び」に対
応する。

初めて『伊勢物語』を学ぶ生徒に限らず、

教職を目指す、教授する、研究の糸口を掴
みたい等、様々な動機から本書を手取る
人々にとって、『伊勢物語』との往還に最
良の案内となるだろう。また、「資料」及
び「付録」の参考文献は、研究への展開を
予期した万全の備えとなっている。
(二〇一八年三月 明治書院 A5判 二
四〇頁 本体二二〇〇円)

〔牛山睦子〕